

【激甘NTR】義父の救済SEX2

く隣で眠る夫の横で義父の愛撫に悶える夜。
指輪を外し、身も心も義父へ自ら堕ちてゆく

サンプル（一部抜粋）

「んー…」

アラームの音で目が覚める。

「…朝ごはん作らなきゃ。」

背を向けて眠る幸人をチラッと見て、私は大きく深呼吸をした。

お義父さんとの関係が変わって約一週間。

朝は普通の主婦を演じながら幸人の好みに合わせた朝食を作り、送り出す。
でも…幸人が家を出た瞬間、その仮面は剥がれ落ちる。

「…お義父さん。」

「おいで。」

ソファに座るお義父さんの上に跨り、キスをねだる。

幸人とレスになって四年以上。

お義父さんだけが私を救い出してくれた。

バレないようにするから、どうかこの時間だけは女でいたい。

（中略）

そう思った瞬間、玄関の方からガチャッと音が鳴った。

反射的にビクッとして慌ててお義父さんから離れ、スカートとシャツを整えて急いで立ち上がった。

その直後、開かれてたドア：

慌てた様子で飛び込んでくる幸人。

「愛し、スマホ忘れた！取って！」

日常が一気に呼び戻される。

「あ、う、うん……」

熱を隠しながら夫のスマホを探す。

お義父さんは冷静に口元をサッとぬぐい、一緒にスマホを探していた。

「お、あったよ。」

お義父さんはスッと私の背中を撫でて、まるで盾になるかのように玄関に向かった。

「ありがとう、父さん！」

じゃ、行ってくる！」

幸人は何も気が付いていないようで…普通にスマホを受け取って走って行った。

「…」

私…何してるんだろう…

イレギュラーな出来事に動悸がした。

それと同時に…いかに自分が最低な行為をしているのか、改めて突きつけられた感覚がした。

「…私、辞めます。」

幸人を裏切って…こんな妻でごめんなさい。

全部、忘れてください…」

混乱した頭でそう告げ、私は自分の部屋に閉じこもった。

(中略)

その夜、私は夫と向き合おうと寝室で声をかけた。

「幸人…したい。」

「愛ってさ。性欲強いよね。」

正直、疲れてるしそんな余力なんて無い。

そんなにセックスが大事？」

冷たい目でそう言われ、みじめだった。

「…スるんだろ？ほら、脱いで。

…ちよつと待ってて。勃たせるから。」

私の身体を見ても、裸を見ても反応する事のない夫の身体。

手で自分のモノに触れて目を閉じて上下に動かし、少しずつ勃起させていく…

それを隣で見守る私…。

彼は頭の中で何を考えて勃たせているんだろうか。

分らないけれど、私は彼の脳内に一ミリも存在はしていないんだろうな。

それだけは明確だった。

数分後、ようやく元気になったソレを…私の入口へとあてがった。

「…入れるよ。」

「うん…」

「満足した？」

明日の朝ごはんは豪華にしてね！」

夫は精液をぶちまけると、あつという間に背を向けて眠りに落ちた。

スーッと涙が頬を伝った。

こんなのセックスじゃない。

お義父さんの暖かい体温が、私を狂わせてくれる甘さが欲しかった。

（中略）

私はついに限界を迎え、お義父さんの部屋をノックした。

「お義父さん…寂しい…」

涙をこらえながら吐き出す私の頭を、お義父さんは優しく撫でた。

「愛ちゃんは幸人を裏切る覚悟は出来ていないだろう？
ただここに逃げてきただけ。」

そんな都合よくはしてあげられないよ。」

「…これ、あげようか。」

中には淫らな形をしたパイプが入れられていた。

「俺の気が向いた時にスイッチを入れる。」

愛ちゃんは自分では操作出来ない快楽で満足できる。どうかね。」

（中略）

そうして全員が食卓につき、いただきますと挨拶をして食事を始めた。

「んー、うまい！」

嬉しそうな幸人の声を聞いた瞬間、プラスチックの硬い振動が骨を伝って子宮まで響く感覚が一気に駆け抜けた。

「…っ、んっ！」

いきなりの刺激に思わず声を漏らしてしまった。

「ん？どうした？」

不思議そうな顔をする幸人に、私は慌てて首を横に振った。

「へ、変な所に…入りそうで…むせちゃった…」

その場で思いついた適当な嘘を口にしながら、クリトリスと中でゆっくりと動く刺激にグチュッと濡れるのを感じた。

「ちゃんと噛んで食べなよー」

呑気な夫の言葉にうなずきながら、ちらっとお義父さんを見ると…お義父さんの瞳は明確に私を捉えていた。

夫を送り出した後、お義父さんは私をソファに座らせた。

「ほら、下着を外しなさい。」

どんな状態になっているかも見せて。」

「ひあつ、ああ…気持ちいい…お義父さん…」
機械の冷たい振動。

けれどお義父さんの視線が混じると、途端に熱くなる。

「イきたい…」

「いいよ。イきなさい。」

絶頂を迎えても、心はどこか寒かった。

お義父さんの「熱さ」が欲しくてたまらなかった。

(中略)

「…ねえ、幸人。」

「ん？」

「私の事、好き…？」

私の質問に幸人は少し目をそらして数秒沈黙し…

「家族として好きだよ。」

と答えた。

「家族と…して？」

「うん、だって家族じゃん？」

女とか男とか、そういうのを超えた存在とかさ。

なんか……空気？

いる時は必要だなんて意識はしないけど、いなくなったら生活出来ないの？
んー、うまく言えないけど、大事な家族だよ。」

一見優しい言葉……なのかもしれない。

でも私には牽制に聞こえた。

家族なんだから、これ以上を求めて来るなよって言われているような気がした。

(中略)

数分後、カチャッと小さな音を立てて夫婦の寝室の扉が開いた。

お義父さんは人差し指を唇にあて、しーっとジェスチャーをしていた。

私は静かに頷きながら身体を起こした。

お義父さんはゆっくりと私に近付き、ぎゅっと強く抱きしめてくれた。

幸人の軽いハグとは違う。

逃げ場をすべて塞がれるような、重圧で壊されてしまいそうなほどのハグ。

私は浅く呼吸をしながら、お義父さんをぎゅっと抱きしめ返した。

「……おしおきだよ。」

お義父さんは私の耳元で小さな声でそう呟いた。

「え？」

「…一体どれだけお預けをくらったと思ってる？」

「どれだけ…こうして触れたかったか。」

お義父さんは小さくそう言う私の耳をそっと指で撫でながら、甘く深いキスをしてきた。

お義父さんは布団の中で熱い吐息を漏らしながら、ゆっくりと私の膣に指を入れた。
くちゅっとした音が鳴る…

的確に私の気持ちのいい場所を押し上げるお義父さんは…私の身体を私よりも理解しているんだらうな。

お義父さんに知りつくされた身体を、もっとおかしくしてほしい…

夫のイビキを聞きながら頭はお義父さん一色だった。

「んん…ん、んっ、…っ」

お義父さんの指が入った瞬間にぐちゅっと中が湿るのを感じた。

クリトリスをじゅるじゅると舐められ、中で太い指は動く…

久しぶりに与えられる暖かい愛撫に、あつという間に私は限界を迎えていた。

「んん、ん…ああ…イく、イっちゃう…」

我慢出来ずに漏らしてしまう声……

お義父さんの指が激しくなる……

でも次の瞬間、幸人の背中がびくつと動いた。

「ん？」

幸人の小さな声が響いた。

お義父さんの唇が少し私から離れた。

「なに……してんの。」

（全容は本編にて）